

特集テーマ 〈「格差」に挑む〉について

紀要編集委員会

生活保護世帯・就学援助世帯の増加をはじめとし、若年層における非正規雇用の増加や、いわゆる「ワーキングプア」の広がり・「相対的貧困率」の高さなど、1990年代半ばから今日に至る日本社会における経済的な格差の拡大、とりわけ格差の底辺部分の広がりが指摘されている。格差はまた、経済面を基礎としながらも、生活の社会的・文化的局面に及んでいるという点や、地域間の格差拡大なども着目されている。1950-60年代に始まる経済成長期における「格差の縮小」時代から、日本社会の「平等神話」や「総中流神話」がある程度幅をきかせ浸透することができた1980年代や90年代初頭までの時代と比べるならば、社会構造においても社会像・社会認識においても、この間に重大な様変わりが起こったことは間違いないだろう。

「格差は、そもそも人間社会につきものだ」と言ってしまうまでもかもしれない。しかし何らかの規準で見た際にそこに「差」があるという状況を敢えて「格差」と呼ぶとすれば、①その量的な差の開きが「何らかの上下関係」を想起させるような質的な差にまで画然と広がっているという場合、あるいは、②本来平等であるべきという理念的要請からは「あってはならない差」がそこに存在すると見られる場合(男女格差、民族格差、などなど)、といったこの用語の使用理由が考えられるだろう。だとすれば「格差など世の中につきもの」と澄ましてはいられない、むしろ「かなりの問題性がそこにある」というイメージ喚起力を「格差」という言葉は持っている。この10年余に日本で進行してきた社会変化に対して、「格差」・「格差社会」という表現はそれだけの社会問題性を提起し、かつそれをシンボライズする言葉となっている。

こうした時代状況の中で教育の営みという文化領域は、格差問題にとっての一つの結び目になるような重要な位置を占めているだろう。と言うのは、

- (1)そのような格差と底辺の広がりに伴って「子どもとその家族（子育てを含めて）」のあり方がどう変化・課題化しているのか自身が、子育て・教育問題であり、
- (2)また、そのような子育て・家族生活変化を心身に刻んだ子どもたちが学校をはじめとする諸教育機関にやって来るのであるから、そこには子どもたちが背負った格差問題の諸機関内部への浸透と反映という状況がある。
- (3)それとは逆の関係として、幼児教育から各学校段階、高等教育までの諸教育機関の今日的なあり方が、そこでの産出（学習者たちの学力・進路・キャリア・逸脱などを含めて）を通して、家族・地域間の格差と底辺の広がりを事実上再生産する働きをするという面が注目される。
- (4)そこには、社会的格差の侵入・再生産領域となっている教育システム自体が、制度として内部格差（学校間・大学間格差など）を拡大させ、その底辺部分の広がりが見られるという問題が伴っている。
- (5)それら(1)～(4)の問題・課題はまた必然的に、それらを受け止めてそれを少しでも「是正」し、「支援」しようという意図・指向、そして政策や教育機関運営・実践にどのような現代的あり方・性格をもたらしまた要請しているのかという課題を提起している（それは単に理念や希望だけの問題でなく、現実の中ですでに展開していることがらである）。

本特集は、教育の営みに絡んで現実に進んでいる格差問題に対して、以上のようないくつかの視角を持ちながら、この「格差と教育」という追究課題に〈総論〉的、および各課題領域ごと〈各論〉的にアプローチするものである。

(文責： 特集担当の一人として、 久富善之)